様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １０ 日現在

機関番号：３４３１６
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｈ０１３４８

研究課題名（和文）中央アジアの仏教遺跡における地域間交流の研究

研究課題名（英文）A Study on the Inter-regional Relationships of Buddhist Sites in Central Asia

研究代表者
岩井　俊平（IWAI, Shumpei）

龍谷大学・公私立大学の部局等・准教授

研究者番号：１０３９２５４９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　13,250,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究の目的は、中央アジアにおける仏教遺跡の地域間交流のあり方を明らかにすることである。まずキルギス共和国のチュー川流域に所在するアク・ベシム遺跡の「第２仏教寺院址」で発掘調査を行い、既掘の祠堂以降の東隣で人工的に粘質土を積み上げた「積み土遺構」を確認した。本遺構の性格を確定させることはできなかったものの、建造物の基壇またはそのための整地層と考えられ、第２仏教寺院址において少なくとも２つの建物が並ぶ配置があったことを確認できた。
　また、アク・ベシムの他の仏教寺院址や、同じくチュー川流域に所在する仏教寺院址、さらに中央アジアの仏教遺跡に関する情報を収集して比較し、広域における見通しを確立した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　中央アジアにおける仏教遺跡の研究は、19世紀以来の蓄積があるものの、多くの調査は古い時代に行われたもので、その際の情報が長く研究上も使用されてきた。そのため、本研究においてキルギス共和国のアク・ベシム遺跡・第２仏教寺院址の新たな発掘調査を行い、これまで単独の祠堂として取り上げられてきた同仏教寺院について、異なる伽藍配置を明らかにしたことは大きな成果と言えるだろう。
　また、これまでは各地域の個別の研究がほとんどであったのに対し、本研究では時代ごとの変遷を広い地域で比較検討することにより、仏教遺跡による地域間交流のあり方を一定明らかにしたことも重要な意義があると考える。

研究成果の概要（英文）：　The aim of this study is to clarify the nature of inter-regional exchanges of Buddhist monuments in Central Asia. First, we excavated the 'Second Buddhist Temple' at the Ak-Besim site in the Chu River basin in the Kyrgyz Republic, and 'piled-up soil' remains were identified to the east of the previously excavated shrine. Although it was not possible to determine the nature of this structure, it was considered to be the basement of a building or a preparation layer for a building. Thus, we could confirm that at least two buildings were arranged side by side at the second Buddhist temple.
　We also gathered information on other Buddhist temple sites at Ak Beshim, Buddhist temple sites located in the Chu River basin, and Buddhist sites in Central Asia and compared them each other. Consequently, we establish a broad perspective on the inter-regional exchanges of Buddhist monuments in Central Asia.

研究分野：中央アジア考古学

キーワード：中央アジア　仏教遺跡　アク・ベシム　ソグド　トハーリスターン

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

中央アジアにおける仏教遺跡の研究は、19 世紀以来の蓄積がある。特に①現在の中国・新疆ウイグル自治区周辺に含まれるタリム盆地周辺、②アフガニスタン北部、ウズベキスタン南部、タジキスタン南部を含む地域（トハーリスターン）、③キルギス北部のチュー川流域（ソグド地域東端）の３地域に関しては、ガンダーラに端を発する仏教が栄えたことが知られ、地域ごとに研究が進められてきた。しかしながら、そうした仏教遺跡の発掘調査は多くが古い時代に行われたもので、当時の情報が長く研究上も使用されてきた。そのため、地域を横断してそれらの地域間交流を明らかにするための研究は、主として彫刻や絵画の様式を扱う美術史の分野で進められてきたため、それらが出土している遺跡そのものの地域間関係に関する研究が進展しているとは言い難い状況であった。この点は、トハーリスターンとソグドの仏教遺跡を網羅的に紹介した加藤九祚の著作（加藤 1997『中央アジア北部の仏教遺跡の研究』）が現在になっても頻繁に引用されることからもわかる。

さらにこのうち、③に当たるチュー川流域の仏教遺跡については、日本の調査隊が調査・修復に深く関わってきた経緯もあってたびたび紹介されているものの、その仏教遺跡が、周辺地域からどのような影響を受け、どのような仏教を実践していたのかは明確になっていない。一方で近年、この地域の主要な都市遺跡であるアク・ベシムにおいて帝京大学が実施してる発掘調査は、この地に唐が建造した軍事拠点「砕葉鎮」の場所とその様相を明らかにし、この地域に唐の文化が一時的であれ深く根付いていたことを示した。すなわち、チュー川流域にはトハーリスターンおよびソグドの伝統だけでなく、中国の影響も強く存在してることが具体的に判明しつつあった、というのが学術的な背景として重要である。

２．研究の目的

本研究の目的は、中央アジアにおける仏教遺跡の地域間交流のあり方を明らかにすることであるが、上述の背景を踏まえ、特に「③の地域の仏教成立（６～８世紀頃）に際して、①と②の地域の仏教がどのような形で関与したのか」という点を具体的に示すことを第１の目的として設定した（図１）。

そもそも、ソグドの中心地であるザラフシャン川流域においては、多くの発掘調査が為されているにも拘わらず仏教遺跡が発見されていない。一方でソグド東端に当たるチュー川流域においては、アク・ベシム遺跡をはじめクラスナヤ・レーチカ遺跡などでも仏教遺跡が確認され、そこではトハーリスターンとの関係が深い遺構や彫像が発見されるとともに、明らかに唐の技術で製作された瓦が大量に出土するなど、複雑な様相を呈している。すなわち、東から西へ唐の文化が伝播したことが、この地域の複雑さを形成していると考えられる。通常、「仏教の伝播」と聞けば「西から東へ」の方向をイメージしがちであるが、本研究は逆に、「東から西へ」の仏教伝播のあり方を具体的に示すことも大きな目的のひとつとして設定した。

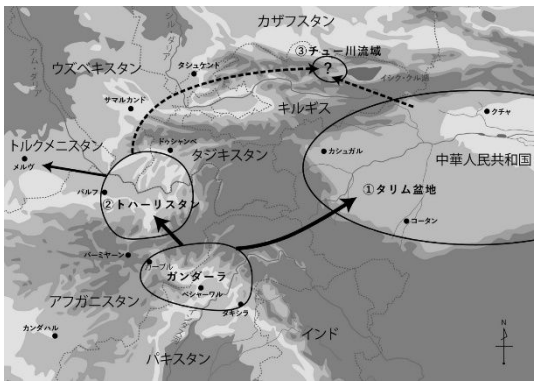

図１　チュー川流域への仏教伝播模式図

３．研究の方法

仏教遺跡の地域間交流の実態を明らかにするため、本研究ではまず、各地の寺院遺構の平面プラン（いわゆる伽藍配置）を比較検討する作業を行った。その際、過去の発掘報告書を精査するとともに、これまでの比較研究を参照する方法を取った。まず基本的な伽藍のあり方としてガンダーラ地域の１～５世紀頃に属する仏教寺院の様相を確認したうえで、タリム盆地、トハーリスターン、そしてチュー川流域の時期ごとの平面プランと比較した。

さらに、キルギス共和国のチュー川流域に所在するアク・ベシム遺跡の第２仏教寺院址については、1960 年代の航空写真・衛星写真の分析によって、これまで知られていない建造物があった可能性が示唆されていることを踏まえ、現地で新たな発掘調査も行って、実際の伽藍配置を改めて検討する作業を行った。

４．研究成果

(1) 伽藍配置の比較検討

上記の方法によって比較検討を行った成果を、論文としてまとめた（岩井俊平 2019「中央アジアにおける仏教寺院の伽藍配置の変遷」『帝京大学文化財研究所研究報告』第 18 集、79-97）。その概要を端的にまとめれば、以下のとおりである。

まず、ガンダーラにおいて２～３世紀までに成立する寺院はストゥーパを中心とし、付近に小型の祠堂や、僧房（しばしば大型の方形僧房となる）が設置される。これらはトハーリスターンでは確実に継承されているが、タリム盆地周辺ではこの時期まで遡る確実な遺構がほとんどなく、比較は難しい。ただし、８世紀まで時代を下げて検討すれば、ストゥーパを中心的な礼拝対象としつつ、周囲に祠堂・僧房を配する基本的な構成は両地域で広く採用されている。

一方で、ガンダーラの場合は小塔や仏像を安置するための小型の祠堂が列をなしてストゥーパを囲む例が典型的であるが、タリム盆地やトハーリスターンにおいてこのような祠堂列を構成する例はまれで、その数少ない例も、５世紀以降の比較的新しい寺院である。代わりに両地域の仏教寺院で伽藍を構成するのは、より大型の独立した祠堂で、中央にある方形の内陣を回廊が囲む「回字形」のプランをとる場合が多い。特にタリム盆地ではこの傾向が顕著で、そもそもストゥーパが認められない寺院も存在している。そして、この回字形プランが寺院において主要な要素となるのがチュー川流域で、ストゥーパが寺院に存在していないのも大きな特徴の一つである。ただし、クラスナヤ・レーチカにおいてこれまでゾロアスター教の拝火神殿とされてきた小丘が、ストゥーパであった可能性が高くなっており、これが唯一の例となる。

以上のとおり、地域・時代によって伽藍配置には違いが存在しているが、地域間交流の実態を明らかにするための要素となるのは、「回字形」の祠堂であろう。この形式は、古くアケメネス朝期の拝火神殿にすでに存在しており、その後ガンダーラの仏教寺院のほか、仏教とは異なる信仰と関連する遺構（例えばクシャーン朝期のスルフ・コータル神殿）にも採用され続けている。つまり、西アジア・中央アジアで古い伝統を持つ建築プランであり、これがタリム盆地の仏教寺院で多く採用されること、さらにチュー川流域では寺院の主要な建造物がこの形となることを考慮に入れることで、地域関係の具体的な様相を説明できる見通しが立てられるものと考えられる。

(2) アク・ベシム遺跡　第２仏教寺院址の発掘調査

本研究の大きな目的である、チュー川流域における仏教の成り立ちを明らかにすることを目指し、上記の伽藍配置の比較検討とも関連付ける形で、キルギス共和国のアク・ベシム遺跡第２仏教寺院址において、新たな発掘調査を行った。

①発掘地点の概要と発掘の経緯

第２仏教寺院址は、1950 年代に発掘が実施され、回字形祠堂（ただし回廊が二重になっている）が確認されていた。しかしながら、1960 年代の航空写真や衛星写真を確認すると、その隣には同規模の建造物が並んでいたことがわかり、その全体を囲む方形の壁の存在も予想できる（図２）。2018 年には帝京大学が部分的な発掘調査を行ったが、遺構と思しき痕跡を平面的に確認したにとどまったため、龍谷大学が 2019 年より本科学研究費による調査を開始することとなった。しかしながら、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴って調査は不可能となり、その後 2022 年４月から５月かけて、はじめて現地での発掘を実施することとなった。2018 年の調査区を改めて精査するとともに、後述する「積み土遺構」の規模と性格を確認するために調査区南辺と西辺にサブトレンチを設け、土層断面の確認を行った。また、調査区北側の土層・地山堆積状況を確認するため、西辺のサブトレンチについては北側に約 25 ｍ拡張した（図３）。

図２　1966 年の航空写真

図３　2022 年の調査区全景

②発掘調査の成果

調査区の上層では、複数の土坑が見つかった。多くの出土土器や採取した炭化資料の年代測定を参考に、仏教寺院廃絶後の８～９世紀に属する遺構と判断している。

また、調査区中央のやや東側の地表下 70 ㎝ほどの地点で、南南東―北北西の方向に直線的に延びるラインと、その西側に広がる灰褐色～灰白色の粘質土の面を確認した。この遺構は、調査

の目的である方形建物と直接的に関係する可能性が高く、広範囲で平面的に精査を行ったが、その規模や性格を明確にすることができなかった。そのため、上述のとおり調査区の南辺と西辺にサブトレンチを設定し、遺構の規模と構造を確認することとした。

その結果、調査区東端より４ ｍ 付近の地点から西側全体に、粘質土を層状に積んだ遺構が続いていることが判明した。その構築方法は以下のとおりである（図４）。

１．灰褐色・黄褐色で締まりのある土を、２～３層にわたって敷き、整地する。各層の厚さは４～10 ㎝ ほどである。
２．灰褐色から赤褐色で、白色の粘土粒を多く含む締まった粘質土を、厚さ 5～10 ㎝ ほど積む。
３．赤褐色で、白色の粘土を層状に多く含む締まった粘質土を、厚さ 3～8 ㎝ほど積む。
４．にぶい褐色で、白色の粘土を粒状・層状に多く含む粘質土を厚さ 5～12 ㎝ほど積む。
５．部分的に、灰白色で白色の粘土粒を多く含むシルト質土を厚さ 5～10 ㎝ほど積む。

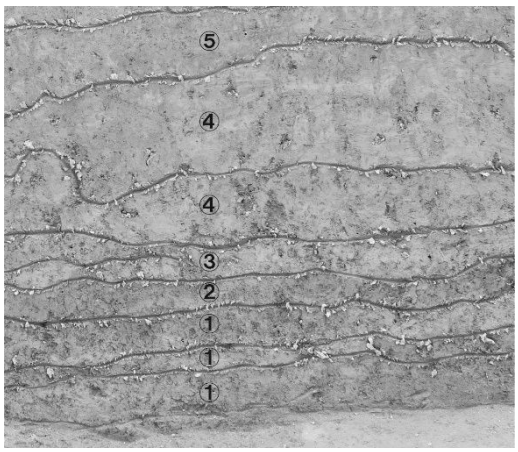

図４　積み土遺構の実際の断面

以上のような互層がサブトレンチの西側全体で確認され、調査区西端まで続いていた。したがって、平面的に確認されていた南南東―北北西の方向に直線的に延びるラインは、この積み土遺構の東端の立ち上がり部分であった可能性が高い。本遺構のように、比較的粘性の高い土を層状に積み上げていく方法は、これまで第２シャフリスタンの南壁や、第１シャフリスタンの南壁・東壁で部分的に確認されていた「版築工法」と共通している。したがってこの積み土遺構は、この地に唐の勢力が到来した７世紀後半以降に構築された可能性が高い。一方で、外壁に比べて締まりが弱く、簡単に掘り抜いてしまうことが可能な点など、両者には明確な違いもあるため、完全に同一の工法とみなすこともできない。また、この積み土遺構を構成する土層からは、ほとんど遺物が出土しないことから、構築にあたっては使用する粘質土をある程度精製する工程が存在したものと考えられる。

いずれにせよ今回の調査では、本遺構の機能を明確にすることもできなかった。現状では、以下のような可能性が考えられよう。

１．建造物の壁
２．建造物自身の基壇、あるいは建造物内に設置された基壇
３．建造物を建てるための整地

使用されている粘質土は、遺構北側の地山を掘って得たと考えられ、その場合、３の可能性がもっとも高い。したがって、この積み土遺構がどのような範囲に広がっているかを検証することで、第２仏教寺院そのものの範囲を明らかにすることができるだろう。

③まとめ

以上のとおり、1950 年代に発掘された「回字形」の祠堂遺構の東隣で、人工的に粘質土を積み上げた「積み土遺構」を確認した。本遺構の性格を確定させることはできなかったものの、建造物のための整地層の可能性が高く、第２仏教寺院址において少なくとも２つの建物が並ぶ配置があったことを確認できた。これまで単独の祠堂として取り上げられてきた同仏教寺院について、異なる伽藍配置を明らかにしたことは大きな成果と言えるだろう。

ただし、新型コロナウイルス感染症の拡大による研究の遅れについて、研究費の繰り越しによる対応を行ったが、特に海外調査においては現地での対応に時間を割かなければならない場合も多く、予定よりも発掘規模を小さくする結果となった。

なお、アク・ベシム遺跡第２仏教寺院址の発掘調査報告については、日本語・英語でそれぞれ作成し、現在は PDF 版として頒布が可能な状態となっている。

(3) 周辺地域との文化交流と「大雲寺」

上記の(1)および(2)の研究成果と合わせ、チュー川流域における最新の研究成果を精査すると、そこにはタリム盆地を経由した中国文化の西漸が大きな影響を与えていることがわかる。伽藍配置で言えば、ストゥーパがなく回字形の祠堂が伽藍の中心になる点などは、こうし地域間交流のあり方を示していると言えるだろう。このような中国文化からの影響はこれまでも指摘されてきたところであるが、特に最近の帝京大学によるアク・ベシム遺跡の発掘調査は、版築技法や瓦製作など、唐の建築技術が相当に浸透していることを示している（帝京大学文化財研究所・キルギス共和国国立科学アカデミー 2020『アク・ベシム（スイヤブ）2019』帝京大学シルクロード学術調査団 調査研究報告３、など）。

さらにチュー川流域で実践されていた仏教の内容についても、中国およびコータン地域の密教との係わりを指摘する研究があり（吉田豊 2020「ソグド語の密教経典とセミレチエ仏教」『帝

京大学文化財研究所研究報告』第 19 集、193-203)、考古学的な成果と矛盾しない。また、『通典』巻 193 に引用される杜環の『経行記』には、砕葉鎮に「大雲寺」があったと明記されており、アク・ベシム遺跡には唐式の仏教寺院も間違いなく存在していたはずである。コロナ禍および発掘用地の借用に関する問題のために、2023 年に繰り越された研究費によってこの「大雲寺」があった可能性のある地点の隣接地を調査したところ、明らかに唐風の彫像台座（図５）が出土した。1930～40 年代に発見されていた唐風彫刻と合わせ、大雲寺の様相が少しずつ明らかになっている点も重要であろう。

図５　蓮華文のある彫像台座

いずれにしろ、本科学研究費による調査・研究によって、チュー川流域の仏教には周辺地域の影響が複雑に入り込んでいることがいっそう明確となった。また、これまでは各地域の個別の研究がほとんどであったのに対し、本研究では時代ごとの変遷を広い地域で比較検討することにより、仏教遺跡による地域間交流のあり方を一定明らかにしたことも重要な意義があると考える。今後は、チュー川流域の仏教成立過程をさらに具体的に示し、「大雲寺」の存在がどのような役割を果たしたのかについてもさらに研究を進める必要があろう。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計11件（うち査読付論文　5件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 山内和也・齊藤茂雄・中山千恵・望月秀和	４．巻 第22集
２．論文標題 2023年度アク・ベシム遺跡発掘調査によって発見された唐代 関連資料について	５．発行年 2023年
３．雑誌名 帝京大学文化財研究所研究報告	６．最初と最後の頁 145-154
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 山内和也	４．巻 第21集
２．論文標題 クズラソフによるアク・ベシム遺跡の発掘 ―層序発掘区と第１仏教寺院―	５．発行年 2022年
３．雑誌名 帝京大学文化財研究所研究報告	６．最初と最後の頁 157-251
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 岩井俊平	４．巻 105-1
２．論文標題 都市の廃絶と交易ルート ―クシャーン朝勃興期のバクトリアの場合―	５．発行年 2022年
３．雑誌名 史林	６．最初と最後の頁 5-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 ジェラルド・クローソン（山内和也・吉田豊訳）	４．巻 20
２．論文標題 アク・ベシム遺跡 ： スイヤブ	５．発行年 2021年
３．雑誌名 帝京大学文化財研究所研究報告	６．最初と最後の頁 85-102
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 A.M.カミシェフ（山内和也・吉田豊訳）	4．巻 20
2．論文標題 アク・ベシム遺跡で採集されたコイン資料	5．発行年 2021年
3．雑誌名 帝京大学文化財研究所研究報告	6．最初と最後の頁 103-126
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 A.M.カミシェフ（山内和也・吉田豊訳）	4．巻 20
2．論文標題 チュー川流域における中世初期コインの新発見	5．発行年 2021年
3．雑誌名 帝京大学文化財研究所研究報告	6．最初と最後の頁 127-136
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 國下多美樹	4．巻 101
2．論文標題 （書評）吉村武彦・吉川真司・川尻秋生編シリーズ古代史をひらく『古代の都～なぜ都は動いたのか～』	5．発行年 2021年
3．雑誌名 民衆史研究	6．最初と最後の頁 59-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 國下多美樹	4．巻 153
2．論文標題 難波の市と宗教空間	5．発行年 2021年
3．雑誌名 龍谷史壇	6．最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 岩井 俊平	4．巻 90
2．論文標題 <論文>ガンダーラの石製小皿と工人集団	5．発行年 2020年
3．雑誌名 西南アジア研究 = Bulletin of the Society for Western and Southern Asiatic Studies, Kyoto University	6．最初と最後の頁 1～19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14989/seinan-asia-kenkyu_90_1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 岩井俊平	4．巻 90
2．論文標題 ガンダーラの石製小皿と工人集団	5．発行年 2020年
3．雑誌名 西南アジア研究	6．最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 岩井俊平	4．巻 18
2．論文標題 中央アジアにおける仏教寺院の伽藍配置の変遷	5．発行年 2019年
3．雑誌名 帝京大学文化財研究所研究報告	6．最初と最後の頁 79-97
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計16件（うち招待講演　9件／うち国際学会　2件）

1．発表者名 岩井俊平
2．発表標題 春季調査　AKB-20区（大雲寺推定地北側）の発掘報告
3．学会等名 シルクロード学研究会（招待講演）
4．発表年 2023年

１．発表者名 岩井俊平・枡本哲・國下多美樹
２．発表標題 中央アジアの仏教寺院を掘る（２）―キルギス共和国、アク・ベシム（スイヤブ）遺跡・大雲寺推定地北側の調査―
３．学会等名 西アジア考古学会
４．発表年 2024年

１．発表者名 Shumpei IWAI
２．発表標題 Japanese Mission to Bamiyan after 2003
３．学会等名 The Symposium “Politics and Archaeological Missions in Afghanistan: Japanese and International Research on Afghanistan and Iranian Plateau”（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2024年

１．発表者名 國下多美樹
２．発表標題 アクベシム遺跡と2023年度の調査概要
３．学会等名 龍谷大学大学院考古学演習報告
４．発表年 2023年

１．発表者名 岩井俊平・枡本哲・國下多美樹
２．発表標題 中央アジアの仏教寺院を掘る―キルギス共和国、アク・ベシム（スイヤブ）遺跡・第２仏教寺院址の調査―
３．学会等名 西アジア考古学会
４．発表年 2023年

１．発表者名 岩井俊平
２．発表標題 アク・ベシム遺跡第２仏教寺院（AKB-18）の調査
３．学会等名 シルクロード学研究会（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 岩井俊平
２．発表標題 キルギス共和国アク・ベシム遺跡（スイヤブ）の発掘調査
３．学会等名 西南アジア研究会総会（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Shumpei IWAI
２．発表標題 Bamiyan Buddhist Caves and Squinches -Contributions from the Japanese Research Team in Afghanistan-
３．学会等名 Society of Architectural Historians（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 岩井俊平・枡本哲・國下多美樹
２．発表標題 中央アジアの仏教寺院を掘る―キルギス共和国、アク・ベシム（スイヤブ）遺跡・第2仏教寺院址の調査（2022）
３．学会等名 西アジア考古学会
４．発表年 2023年

１．発表者名 國下多美樹
２．発表標題 アクベシム遺跡の調査概要
３．学会等名 龍谷大学大学院考古学演習報告
４．発表年 2022年

１．発表者名 國下多美樹・前田詞子
２．発表標題 キルギス共和国・アクベシム遺跡第２仏教寺院址の発掘調査
３．学会等名 第61回龍谷大学考古学談話会
４．発表年 2022年

１．発表者名 入澤崇
２．発表標題 古代インド仏教からの問いかけ-新たなる価値創造に向けて-
３．学会等名 国際仏教興隆協会 日印国交樹立70周年記念講演会（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 岩井俊平
２．発表標題 都市の廃絶と交易ルート ―クシャーン朝勃興期のバクトリアの場合―
３．学会等名 史学研究会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 岩井俊平
２．発表標題 新たな調査成果から見たバーミヤーン遺跡の年代
３．学会等名 バーミヤーン・フォーラム　―二大仏の破壊前と現在：課題と展望―（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 國下多美樹
２．発表標題 交通・経済拠点の形成と都城の宗教空間
３．学会等名 東アジア比較都城史研究会 2021年度第１回共同研究会
４．発表年 2021年

１．発表者名 岩井俊平
２．発表標題 伽藍配置から見た中央アジアにおける仏教の伝播
３．学会等名 名古屋大学最先端国際研究ユニット「文化遺産と交流史のアジア共創研究ユニット」（招待講演）
４．発表年 2021年

〔図書〕　計5件

１．著者名 前田耕作・山内和也編	４．発行年 2021年
２．出版社 明石書店	５．総ページ数 409
３．書名 アフガニスタンを知るための70章（担当：岩井俊平「2　アフガニスタンの風土」「5　アフガニスタンの曙」「33　メス・アイナク遺跡群」「55　アフガニスタンにおける日本の学術調査」）	

１．著者名 前田耕作・山内和也編	４．発行年 2021年
２．出版社 明石書店	５．総ページ数 409
３．書名 アフガニスタンを知るための70章（担当：山内和也「32　求法僧の道：玄奘がたどったアフガニスタン」「40　バーミヤン：光り輝く土地」「70　明日への希望：アフガニスタン人との絆」）	

１．著者名 Rienjang, W. and Stewart, P. (ed.)	４．発行年 2020年
２．出版社 ARCHAEOPRESS	５．総ページ数 264
３．書名 The Global Connections of Gandharan Art	

１．著者名 宮治昭、福山泰子（編）	４．発行年 2020年
２．出版社 中央公論美術出版	５．総ページ数 644
３．書名 アジア仏教美術論集　南アジア　Ⅰ（岩井が翻訳を掲載）	

１．著者名 小松久男（編集代表）	４．発行年 2023年
２．出版社 丸善出版	５．総ページ数 816
３．書名 中央ユーラシア文化事典（「ガンダーラ美術」の項目を岩井が担当）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	入澤　崇 (IRISAWA Takashi) (10223356)	龍谷大学・文学部・教授 (34316)	
研究分担者	國下　多美樹 (KUNISHITA Tamiki) (30644083)	龍谷大学・文学部・教授 (34316)	
研究分担者	山内　和也 (YAMAUCHI Kazuya) (70370997)	帝京大学・付置研究所・教授 (32643)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
キルギス	国立科学アカデミー			